

失った経営権、裁判も不発

黒田忠男氏 [黒田紙業元会長、北斗グリーン社長]

創業80年を超える滋賀県の老舗企業で起こったお家騒動。おっ子に追い出された元会長は3年以上の抗争を経て、競合会社を立ち上げた。無念さをにじませるが「切磋琢磨(せつさたくま)していきたい」とも語る、複雑な心境とは。



【黒田紙業元会長、北斗グリーン社長】
黒田忠男氏

1939年生まれ。66年に黒田紙業に入社し、75年に専務、88年に社長、2004年に会長に就任。14年に退任するまでに、5つの営業所を持つ古紙問屋に成長させた。17年4月に北斗グリーンを設立し、18年春から事業を再開した。

SUMMARY

会社の経営を巡る衝突の概要

会社の株式の5割超を持つ4代目社長が、3代目社長だった会長(当時)を経営から追い出した。その後、元会長側は復権を目指して、2018年にかけて民事・刑事で訴訟を実施。株式の勝手な名義書き換えの是非、土地所有権の取引書類の信ぴょう性などを争った。今年3月に裁判は終了。元会長は滋賀県内に同じ業務を担う企業を立ち上げた。

黒田紙業は関西ではそれなりに名の知れた古紙リサイクルの会社です。1933年創業で、私は3代目の社長・会長として経営してきました。4年前、4代目社長に突如、会社を追い出されました。その後、社長による勝手な株式名義の書き換えなどを訴えてきましたが、復帰はかないませんでした。昔の仲間と新たな会社を興し、今春から事業を始めています。関係者にはご迷惑をおかけしました。情けないと同時に、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

親父が初代社長で、2代目社長は兄でした。4代目の現社長は兄の息子、私にとってはおっ子に当たります。私は1988年の社長就任時から、2人いた弟には「会社を大きくして本家に返すんだ」と言っていました。2004年、社長の座を譲り、私は会長に就きました。

いつから生まれた距離

会長—社長の関係が始まった頃、4代目は従順な青年でした。業界の会合で「黒田紙業にはいい跡取りがいて安泰だ」と羨ましがられたくらいです。だが、いつからか歯車が狂ってしまった。営業部長らの言いなりになり、私を遠ざけるようになっていきました。

12年ごろ「自分1人で経営させてほしい」と言ってきたことがありました。一度は任せましたが、経営方針の作成を部下に任せるなど責任感が欠けていたため、少して元の体制に戻しました。あのとき、我慢すればよかったのかもしれない。

14年2月、裁判所から1通の内容証明郵便が来ました。「経営に口を出さない、営業所に行かない、従業員と接触しない、得意先に行かないという4点を守らなければ解雇通知を出す」といった内容でした。弁護士に相談しましたが、分が悪いということになりました。社長が会社の株式の70%近くを持っていることが分かったからです。

「クビ宣言」に思い当たる節はありません。同年1月に170坪ほどの保有地を売却する際、銀行での決済に社長が行かなかったのです。会計担当の常務に聞くと「営業部長を連れて営業所回りに行きました」とのこと。社長に電話で銀行に向かうように言いましたが、かたくなに聞き入れませんでした。あまりに腹が立ち「お前は社長の値打ちがない、辞表を出せ」と怒鳴りました。

翌日の会議の場で社長は辞表を出し、営業部長と出ていってしまいました。

消えた、引き際の美学と尊敬の念

実力会長とおっ子である社長の衝突。思い出されるのは経営方針を巡って創業者の父親と社長である娘が激しく対立した大塚家具のケースだ。すったもんだの末に社長が株主総会の委任状争奪戦を経て続投したが、2017年12月期単独決算は2年連続の赤字。騒動から3年が経過しても、浮上のきっかけをつかめないでいる。

血族ではないが、積水ハウスでも今冬、会長兼最高経営責任者が10年間コンビを組んでいた社長に追い出された。「切られそうになった社長が多数派工作で先手を打った」(関係者)のだという。前会長はその後、現経営陣が公表を控えた取締役会でのやり取りを明らかにして相手の「不義」を訴えた。事態は沈静化したが、同社の18年2～4月期は戸建てや賃貸住宅の受注高が前年同期を下回った。

トップ同士の関係が密であるほど、いざ進みたい方向が異なったとき、憎悪すら生

まれて激突する。継承の難しさでもあるが、引き際の美学と先達への尊敬の念が時として消えてしまうのは、企業に限ったことではない。今回の黒田紙業もその典型的な例。振り回された従業員や顧客にかかった負荷は大きかったはずだ。

帝国データバンクによると、黒田紙業の17年5月期の売上高は前の期比2%増

の20億1800万円。利益は前の期の10倍近くになったようだ。同社顧問の中村誠弁護士は「裁判は和解に終わっている」と忠告の主張を一蹴。4代目社長に代わって取材に応じた黒田祐史専務は「北斗グリーンとは共存共栄でいきたい」と勝者の対応をみせたが、関係者の信頼をつなぎ留める努力は必要だろう。(北西 厚一)

古紙の価格は高まっている

●古紙価格推移

20000 (円/1トンあたり)



出所:古紙再生促進センターの統計から抜粋、最低値、関東地区



黒田紙業は滋賀県ではひとかどのブランドで、顧客には大手企業も多い

その日の夕方、社長は大津市内のホテルに営業所の幹部らを集め、全員に辞表を書けと迫ったそうです。社員側の抵抗に遭ってこれは実現せず、社長の辞表ものちに撤回となりました。

黒田紙業の株式数は4万4000株です。先ほど社長が7割分を持つことが分かったと言いましたが、保有株は2万1460株のはずでした。調べてみると一部親族の株の名義が書き換えられていました。そこで私は親族とともに「私文書偽造」で告訴しました。書き換えられた株は元に戻りましたが、51%が社長側に残りました。

土地の所有権でもトラブルがありました。先代の死後、社長の母親が3分の2、社長が3分の1を相続した約100坪の土地が、いつの間にかすべて社長のものになっていたのです。「土地を譲

渡する」という母親のサイン入りの書類が法務局に出されていたのですが、母親は記憶にないと言います。我々は書類が偽造されたとみて、警察に捜査を頼みました。ただ、実証はできませんでしたが、最終的には書類に押されていた実印が決め手となりました。

昔の仲間のため新たに起業

黒田紙業の経営が順調なら、引退も考えました。ただ、黒田紙業の社員らから「会長、助けてください」という嘆願が相次ぎました。「社長が話を聞いてくれない」「何かいうと左遷される」。そんな意見が大半でした。仲間が苦しんでいるのは見るに忍びません。取引先からも不満の声が出て、黒田紙業との取引をやめる会社も出てきました。

何とかしなければならぬと思い、「北斗グリーン」を立ち上げました。今年3月には営業所を開設しました。黒田紙業を潰したいわけではありません。月7000トンの古紙を扱う老舗とできたばかりの会社では信用力も違います。

それでも、多くのベテラン社員が黒田紙業をやめ、北斗グリーンに入社しました。従業員とともに、小さな木を大木に育てていくよう邁進していく覚悟です。会社良し、従業員良し、取引先良し、この「三方良し」をかなえることが、北斗グリーンの目的です。

伝え聞くところでは、黒田紙業の社長は最近「会長にはお世話になった」と周囲に語っているようです。今後は、同じサービスを提供する会社として切磋琢磨し、お互い顧客の満足度を上げていければいいと思っています。